

はじめに

今年度は、腰痛が研究の対象とされています。

腰痛は肩こりと伴い鍼灸治療の最適症であり、どなたも一番多く取り扱っている疾患である。と、言うことは、現代医学では的確な治療手段を持たないと言い換える事も出来る。

さて、その治験発表であるが、共通認識のもとに発表を行うのであるならばそれもよいが本日ここにお集まりの皆さんはそれぞれ鍼灸治療に対する認識が若干違うものと思う。ここで私が腰痛をどのように直したかを発表しても何ら参考にならないと思いますので、今日は、漢方鍼治療（経絡治療）では腰痛をどのように考えて治療するか。その概略を治験例も交えて話をします。

腰痛の原因

内臓の病変→腎臓結石、胆石、胃・十二指腸潰瘍、糖尿病、子宮筋腫、子宮後屈など。

運動機疾患→椎間関節捻挫、仙腸関節疾患、過労、特定作業、不良姿勢などによる筋、靭帯損傷など。

骨の変性→椎間板ヘルニア、変形性腰椎症、脊椎間狭窄症、脊椎分離症、骨粗鬆症など。

その他→限局性髄膜炎、脊椎腫瘍など。

話をわかり易くするために西洋医学的病名を羅列しましたが、慢性急性を問わず腰痛は鍼灸治療がもっとも適応する疾患の一つである。

ここまではどなたも同じ捕らえ方である。

漢方鍼治療では腰痛を「気・血・津液」いずれの過不足によって起こったかを八綱理論を交えて証立てするのである。

『素問』脈要精微論第十七に「腰は腎の府」とある。

『素問』宣明五氣篇 第二十三には、「肝は筋を主る。腎は骨を主る。」とあるように腰痛には、肝腎要と言われる肝と腎が密接に関連しているので今日はこの肝と腎の変動による腰痛にしばらく話を進める。

#### 1 四診法（望・聞・問・切）

① 望診と聞診は難経に「神聖」と言われているようになかなかこの域には到達できないのでこれは省略する。

#### ③ 問診

〔基本的問診〕

原因・経過・既往症・既往歴などを問う。

自発痛か運動痛かの確認。

姿勢による痛みの変化及びその程度の確認。

腰以外の痛む部位の確認（臀部、下肢、背部、項部など）

腰痛に伴う症状の確認（発熱、悪心、嘔吐、便秘、下痢など）

〔証につなぐ問診〕

①ぎっくり腰（重い物を持った時、朝歯磨きの時、下の物をとろうとして腰をかがめた時など）やくしゃみをしたとたんに腰痛を起こした→肝虚陽虚寒証。

②肉体労働による筋肉疲労→「久しく行えば筋を傷る」→肝虚証。

③長時間の同一支正による痛み（運動不足）→「久しく座すれば肉を傷る」、「久しく立てば骨を傷る」→脾虚または腎虚。

④寝過ぎて腰痛が起こる→「久しく臥すれば気を傷る」→気を破ると言うことで肺虚としたいところだが、実際には肺腎の虚、つまり腎虚証や肺虚肝実証が多い。

⑥寒えによる腰痛（クーラー）→肝虚寒証または腎虚寒証。

⑦腰痛と言えば腎虚（古典では房事過度を戒める）→腎が正常であれば過労や冷えなどで

腰痛を起こさない。

⑧外傷による腰痛（交通事故など）→肝虚証や肝実証。

⑩来院するまでの治療経過を問う→鎮痛剤の服用の有無、按摩やカイロプラクティックなどの治療を受けていないか。

⑬熱病後の腰痛→脾虚肝実熱証で少陽経の異常が多い。

⑭婦人科疾患の有無→朝起きたときに痛く、起きていると治るのは子宮後屈の可能性がある。

⑮月経に絡む腰痛→脾虚肝実証。

#### ④ 切診

##### 切経

候肺診では先ず督脉経の変動を診る。→繰り返し腰痛を起こした事があるのはすぐに解るので予後を的確に判断する。→体質証として治療。

手術痕の有無（椎間板ヘルニアなど）→予後不良（手術をしていない場合は有効）。

##### 脉診

##### 腹診

小腹不尽→腎虚

右臍傍の拒按→腎虚で水をさばく

左臍傍の拒按→肝実悪血→灸頭鍼が有効。

## 2 四大病型（陰虚内熱・陰盛内寒・陽虚外寒・陽盛外熱）

### ①肝虚証

#### ① 肝虚陰虚熱証

腎の津液不足→肝の血不足→ 虚熱腰痛

『病因指南』にも「肝は筋を主る、筋は骨節に会す、故に腰節は筋の大会なり・・・とある。

原因は様々だが、腎の津液が虚すと同時に肝血が不足すると熱が発生する。発生した熱はさまざまな経絡に波及し、気血の循環を阻害して腰痛を発生させる。その時に熱の停滞が多いものを肝虚熱証という。この熱のために痛むのである。

『素問』刺腰痛論 第四十一に「腰痛、上熱する」とある。あるいは「厥陰の脈、人をして腰痛せしむ、腰中、弓屈の弦を張るが如し」とある。これらは熱があるために痛むものをいったものである。

肝虚熱証の熱は陰虚（津液や血の虚）から発生している。そのために少し古い腰痛になると表面は冷えて、熱は内側に潜む。この表面の冷えと内側の熱によってまた痛むのである。やはり刺腰痛論篇に「腰痛、中熱する」とあるのは、このような状態をいったものである。最初に述べたように、肝虚証によって様々な経絡に痛みが発生する。

主となるのは少陽経だが、少陽経の別絡や陽維脈などにも波及し、また太陽経や陽明経にも痛みを起こすことがある。

証決定のポイント

患部及び表が熱い。

④急性の腰痛で、少しでも動くと筋肉が痙攣したように痛んで動けなくなる場合がある。必ず胆経も治療する。

#### ② 肝虚陽虚寒証

肝虚陰虚が慢性科→ 気血両虚→ 腎陽不足→ 虚寒腰痛。

肝虚陰虚が慢性になると熱が無くなり冷えが多くなる。これを肝虚寒証という。

肝虚寒証になると津液と血だけでなく、命門の陽気も無くなっている。血と陽気がないために筋に潤いが無くなり、引きつり痛むのである。

これを刺腰痛論では「腰痛、上寒する」と述べている。ただし、体質や原因によっては、

最初から肝虚寒証になっていることもある。

証決定のポイント

患部及び表が冷たい。

⑤朝起きてすぐには動かしにくく、午後から楽になるのは血虚のための腰痛である。

### ③ 脾虚肝実悪血証

脾虚陰虚の津液不足→ 胆に波及→肝実熱→ 拒按腰痛

肝実熱が慢性となり、悪血が出来て肝実証となって起こっている腰痛もある。

悪血による腰痛は若い女性に多い。月経時に発熱すると脾虚肝実熱証から脾虚肝実証となり、月経時に腰痛を起こすようになる。

証決定のポイント

交通自己の既往症がある。

### ④ 肺虚肝実悪血証

肺気の虚+腎の津液虚→ 悪血停滞→ 拒按腰痛

肺虚とは気の停滞を意味している。同時に腎の津液が不足して肝血に潤いが無くなり、停滞して悪血となったものを肺虚肝実証という。

脈が沈、芤、短で肺虚の気虚または気滞のように診えても、腰痛がある限り

必ず腎虚の津液不足が関係する。つまり肺虚肝実証とはいうが、実際の病態は、腎虚肝実が主になっている。肺虚はその原因をいったものである。

腰痛には必ず腎虚が関係するといったが、腎虚になる原因は老化によるものが第一である。次いで房事過度、および過少がある。

要するに房事過度でも過少でも腎虚になる。房事過少の場合は気血の停滞があるので肺虚肝実証になる。

証決定のポイント

①中年以後で肥満した慢性腰痛は大部分がこの証である。

③便秘、食欲旺盛、肩凝り、気鬱、足冷え、のぼせ、頭痛などの病証がある。

④慢性腰痛があれば、婦人科疾患の既往症がある。

①曲泉から上の肝経と三陰交、血海、殷門などの圧痛を確かめる。

①右の脇下硬がある。

②下腹部に悪血性の抵抗や圧痛がある。

③鼠径上部に圧痛がある。

### ⑤腎虚陰虚熱証

津液不足→ 膀胱経熱→ 腰痛

『素問』脈要精微論第十七に「腰は腎の府」とある。

『病因指南』では「もろもろの腰痛は腎に属す、腎液不足して骨髓乾燥するときは、関節利することあたわずして腰痛せしむ」といっている。

要するに腎経や膀胱経が悪いための腰痛もあるが、腎の津液が不足して悪くなっているものが多いためである。

これを『病因指南』では真陰の不足という。

つまり津液が不足して熱が発生している（腎虚熱証）

熱が発生すると足または足裏が煩熱し、熱が表に出ていくために汗が出やすくなる。汗が出るとますます津液は不足して痩せてくる。あるいは膀胱に熱が波及するために小便自利または不利になる。もちろん腰痛もある。腰痛が起こると下焦全体が弱くなるために脚が弱くなる。あるいは熱が上昇するために口渇、動悸、息切れなども起こる。

ただし、肝虚熱証と同じで、この熱も虚から発生している。そのために加齢とともに熱が少なくなる。熱が少なくなると煩熱していた足が冷えやすくなる。

あるいは汗が出にくくなり、体表部に水の停滞を発生させる。そのために肥満してくる。

そして、腎虚陽虚寒証へと移行して行くのである。

ただし、腎を補わない限り、津液不足はそのままである。そのために腰椎の変形が起こる

ようになる。骨粗鬆症による腰痛や背部痛にもこの証がある。

証決定のポイント

- ⑤前屈姿勢だと腰が楽だというのは腎虚である。
- ⑥腎虚熱証だと足裏煩熱、足裏痛、脚弱、口渇、動悸、息切れなどがある。
- ②督脉上の痛み、及び圧痛は即治療点となる。
- ①天枢から下の胃経が隆起して、少腹不仁がある。
- ②水が多いと表面は軟弱だが、深い部分に硬結がある。

#### ⑥腎虚陽虚寒証

命門陽虚→脾胃の寒→腰痛

腎虚熱証の熱が極めて少なくなるか、最初から腎の津液と命門の陽気がなくなって冷えていることがある。これを腎虚寒証という。

『病因指南』では「腎は水臓たりと雖も、水中に自ずから火ありて蔵る、これを命門の陽、下焦の元氣とす、この陽氣虚する時は、水液凝りて流れず、腰節これがために痛むことを致すものあり」と述べている。

これは命門の陽氣が虚すと相対的に余分な水が多くなり、冷えて腰痛を起こすということを示したものである。

腎虚寒証が慢性になると、命門の陽氣が足りないために脾胃にも寒が波及することがある。これを『病因指南』では「腎氣虚冷して中焦、湿土の氣、このんでここに乗ずるを以て、腎氣ますます著してめぐらず、遂に体重く、腰下冷痛せしむることを致す、名づけて腎虚という」と述べている。

このような状態になった腰痛は老人に多い。そのために骨粗鬆症にこの証がある。

これは先に述べた脾虚から腎虚になる証の逆であるが、結果としては同じだから脈診だけでは区別できない。原因、経過などをよく問診し、病証も含めて診察しないと間違えることがある。

証決定のポイント

- ②長く立っていると痛くなる。
- ③眼が覚めたときに、腰に板を張り付けたような感じの痛みがある。
- ④腰が重くて下に引っ張られるような感じがする。
- ⑦小便自利、腰以下の冷え、便秘、食欲はあるが直ぐに満腹になり思ったほど食べられない等。

下腹部全体が軟弱。

#### 《参考・引用文献》

『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社

『臟腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会

『現代語訳・黄帝内経素問』 南京中医学院医経教研組編 東洋学術出版社